

北朝鮮の市民生活 (ライブラリー・コーナー)

著者	狩野 修二
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	203
ページ	51-51
発行年	2012-08
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003915

北朝鮮の市民生活

狩野修二

朝鮮民主主義人民共和国（以下北朝鮮）は、二〇一一年一月に金正日総書記死去後、その息子である金正恩が最高指導者の地位を継ぎ、現体制を当面維持していくことが明らかとなった。度重なる自然災害や、経済政策の失敗等から依然厳しい経済状況が伝えられているが、そのなかで北朝鮮の市民はどのように暮らしているのだろうか。

北朝鮮の市民の生活を知るための資料は主に、北朝鮮に旅行や短期訪問した外国人の旅行記、留学や人道支援等で一定期間以上滞在した人により執筆されたもの、また脱北した北朝鮮住民により書かれたもの、あるいは彼らにインタビューすることにより作成されたものなどがあげられる。本稿では、これら資料のうち、二〇〇〇年以降に出版された資料を中心にいくつか紹介していきたい。

まず、北朝鮮での市民生活の概観を知る資料として、アンドレイ・ランコフ著『民衆の北朝鮮―知られざる日常生活』（花伝社二〇〇九年）があげられる。著者は一九八〇年代に北朝鮮に留学経験のあ

るロシア人朝鮮研究者である。この著作は、脱北者へのインタビューと最近訪問して得られた情報をもとに作られており、メディア、日常生活、レクリエーション、ファッション、家庭問題、乗り物、学校等の項目立てがあり、北朝鮮での生活全体および管理体制を客観的な視点から知らることができる。

『北朝鮮のリアル―住民・脱北者の証言から読む金正恩体制の明日』（東洋経済新報社二〇一二年）を著したチヨ・ユニヨンは大学院で北朝鮮学を専攻し、脱北者支援団体でのボランティアや韓国に亡命後の黄長燁元・労働党幹部の秘書を務めたこともある研究者である。この著作では、インタビューで得られた脱北者の生の声をふんだんに載せており、より身近な視点から北朝鮮の現状を知ることができ、第一章の「等身大の北朝鮮人」ではラジオでの国外情報収集やキリスト教の布教活動、また市場での商売を通じて経済力を持ち始めた女性などについて書かれており、また第四章「北朝鮮の生活文化」では韓国ドラマやK-POPが表

向きは禁じられていながらも隠れて視聴している人が少なくないこと、暮らし向きがよくないなかで、占いが盛んに行われていることなど、具体的な生活の様子を伝えている。既に北朝鮮国外にいる脱北者からの情報ではなく、現在北朝鮮に暮らししている人々の様子を伝えるものとしては、『リムジンガン』（アジアプレス出版部）が数少ない資料のひとつとしてあげられる。北朝鮮に在住する北朝鮮人の記者が隠しカメラで撮影しな

らするインタビューや映像は、今の北朝鮮を伝える貴重な情報である。二〇〇八年から季刊で発刊された後、不定期刊行となってしまうが、二〇一二年二月発刊の第六号が現時点で最新刊となっている。ミサイル・核騒動に対する住民の考えや不動産取引、デノミ施行後の状況、また世襲後継に対する声など、その時々が発生するトピックに関する北朝鮮国内の反応をすばやく伝えている。また『リムジンガン』の記者の居住地が北朝鮮国内にちらばっているということも特徴のひとつであろう。韓国への脱北者は、約七八%が咸鏡道（北朝鮮北東部）の出身者と言われているため、情報に地域的偏りがでてしまう可能性があるが、

『リムジンガン』は比較的広い範囲で情報収集が可能だと思われる。

出来事やトピックからではなく、一人のあるいは複数人の半生を綴った資料も、彼らの生活を知るよい資料である。

齊藤博子著『北朝鮮に嫁いで四十年―ある脱北日本人妻の手記』（草思社二〇一〇年）は、一九五〇年代から始まった北朝鮮への帰還事業により、在日朝鮮人である夫とともに北朝鮮に渡った日本人妻が二〇一〇年に脱北し、日本に帰国するまでの記録である。日本人妻という特殊な立場ではあるが、約四〇年という長い歳月を北朝鮮で過ごした彼女の記録は、北朝鮮人の生活となんら代わりないであろう。他の多くの住民と同様に配給が止まり、日々の食事に苦勞し、ヤミ商売を行ったり、公開処刑に立ち会わされたり、娘が密輸で逮捕され収容所へ送られたりと厳しい生活を送っていたことが記されているが、一方で収穫後の畑で、じゃがいもを見つけた喜びや、孫にあめ玉を買ってあげる楽しみ、また北朝鮮の美しい農村風景を愛でる気持ちなども記されており、北朝鮮でもあたり前ながら、こうした日常生活があることを伝えていく。また脱北についても、

元々は本人が望んで行ったものではなく、ブローカーの誘いにより、成り行きに近い形で行われたという記述はこれまでの脱北者への認識と異なるところが興味深い。

バーバラ・デミック著『密閉国家に生きる―私たちが愛して憎んだ北朝鮮』（中央公論社二〇一一年）は七年前にも渡る脱北者との対話をもとに、清津出身の六人の人物に焦点をあて、彼らの半生を再現したものである。経済的苦境のなかでの、思想や商売、恋愛や家族関係など、物語を読むような形で北朝鮮での暮らしを知ることができ資料である。

以上、紹介した資料の数は多くないが、その内容や著者の立場は様々である。北朝鮮に関する情報は、脱北者たちの証言などにより以前より得やすくなったと言える。しかし居住地や階層の違い、家庭環境、経済状況、置かれている立場などにより、当然ながら彼らの生活状況は大きく異なってくる。まだまだ得られる情報が少ないなかで彼らの生活を知るためには、様々な視点から複数の情報を参照することが必要であろう。

（かのう しゅうじ／アジア経済研究所図書館）